

あの「聖なる防衛」をもう一度か？ ——イラン・イスラーム革命防衛隊のイラクの対「イスラーム国」戦争支援の背景

松永 泰行

はじめに

2015年7月14日、イラクのバグダード市内で、ある「国葬」が執り行われた。報道映像と写真を見る限り、参列者は数百名程度とやや少なめであるが、納棺された遺体を運ぶ車が二転三転した後、実際に葬列が動き出したときには、遺影を掲げた儀仗警官に先導され行進する警察音楽隊は、赤白黒のイラク国旗、白と緑のバドル組織(Munadhdhamat Badr)旗、赤の対「イスラーム国」人民動員隊(al-Hashd ash-Sha'bi)旗という三種の旗を掲げていた。その後に続く大型の警察車両の荷台に結びつけられた納棺のすぐ後ろには、黄色の「カタール・サイイドゥ・シュハダー」旗を掲げた迷彩服を着た民兵が並び、その後を徒歩で追う葬列の中には、2012年3月に分離するまで長らくバドル組織の上部組織であったイラク・イスラーム最高評議会のアンマール・ハキーム議長、かつて「バドル軍」の司令官を務め、現在は自らのジハード組織(「カタール・サイイドゥ・シュハダー」)を率い、人民動員隊の司令官代理(あるいは作戦司令官)ともいわれるアブー・マフディー・ムハンディス、バハーウ・アアラジー(当時副首相、サドル派国会議員)も含まれていた¹。だが、その中心を占めていたのは、何といても、その両脇をハーディー・アーミリー前運輸相(バドル組織指導者)とカースィム・アアラジー議員(国会バドル会派会長)に挟まれて歩むヌーリー・マリーキー前首相(当時副大統領)であった²。四種の旗が掲げられているのもそうであるが、本当の国葬であれば参列していきかべき首相と国防相や国軍幹部の姿が見られなかったのも、内部対立が目立つイラク政府の現状を物語るものであった³。

埋葬されたのは、シーア派「政党」(兼民兵組織)バドル組織第10旅団長のアブー・ムンタダル・ムハンマダーウィー司令官であった。ムハンマダーウィーは、その前日にイラク政府が開始を宣言したアンバール県ファッルージャ解放作戦を、人民動員隊の現地作戦司令官として指揮していた。ファッルージャ郊外のサクラウィーヤでの作戦

開始直後に負傷しながら現場に留まり指揮を続け、「殉教」するにいったという。彼と共に、アブー・ハビーブ・サキーニー（バドル組織第4旅団長）およびアブー・サルハーン・サビーハウィー（第4旅団作戦司令官）も戦死している⁴。つまり、シーア派民兵と義勇兵を中心とするイラク政府の対「イスラーム国」掃討作戦が、聖廟都市サーマッラー防衛およびティクリット解放などバクダード北部のサラハッディーン県で一定の成功を収めた後、二カ月半の準備期間を経て、シーア派民兵が中心の人民動員隊にとっては鬼門ともいえるアンバール県における失地回復と対「イスラーム国」掃討作戦に（正式に）乗り出した初日に、その現地司令官が二人の副官と共に戦死するという暗黒の幕開けとなったことを意味していた。

その初七日に当たる7月21日、今度は隣国イランで、イラク難民が多数住むテヘラン市南部（シャフル・レイ）のドウラトアーバード地区にある「真のカーゼメイニー達」と名づけられたホセイニーエ（儀礼堂）において、ムハンマダーウィー司令官を追悼する会が開催された。表に掲げられた垂れ幕の下に並んでいるロゴから判断するに、ゴドゥス軍（Niru-ye Qods）、イスラーム革命殉教者財団⁵、バドル軍⁶、そしてイスラーム革命防衛隊の四者の共催であった⁷。中で弔問を受けていたのは、イラクから訪れ参列した故人の15歳の長男と弟、さらに、一緒に負傷したのか、大型絆創膏や石膏のギブスを右目と右腕につけている親族、そして息子の隣に立つゴドゥス軍司令官のガーセム・ソレイマーニー少将であった。遅れて参列し、故人の長男の脇に並び始めた顔ぶれには、イラン・イラク戦争末期にバドル軍司令官を務めたモハンマドレザー・ナグディー革命防衛隊准将（現「被抑圧者バスイージ組織」長）、バドル組織と並び人民動員隊の一翼を占めるイラクのシーア派民兵組織「アサーイブ・アフル・ル・ハック」幹部のカイス・ハズアリーとムハンマド・タバータバーイーが見られた。一般参列者には、着任後間もない駐イラン・イラク大使、近所のイラク人たち、さらにアフマディーネジャード前大統領が含まれていた。しかし何より目立ったのは、現在のゴドゥス軍の原型であるイラン・イラク戦争中のラマザーン駐屯地（Qarargah-e Ramazan）司令官であったモハンマドバーゲル・ゾルガドル准将、シャフル・レイに駐屯する革命防衛隊セイエドッ・ショハダー師団長アリー・ナスィーリー准将、ホセイーン・アシュタリー治安維持軍司令官を含む複数の革命防衛隊古参幹部の参列であった⁸。

戦死したこのムハンマダーウィー司令官は、1967年にイランとの国境沿いのイラク南部のマイサーン県に生まれ、1980年9月にイラクがイラン側に攻め込みイラン・イラク戦争が始まると、15歳で家族とイランに移住（亡命）し対イラク軍抗戦に従事し始め、18歳になった1984年にバドル軍（正確にはその前身組織）に入隊したとされる。バドル軍は、イラン・イラク戦争中は革命防衛隊の一部として、イラン側の戦力として参戦していたが、ムハンマダーウィーは1985年にバドル軍のイラク人幹部の故アブー・ムハンマド・タイブからティグリス川東岸でイラン・イラク国境上に位置するハウイーザ湿地帯の偵察部隊に抜擢されたという。同年10月にバドル軍が単独で遂行したアーシ

ューラー第4作戦では、イラク側マイサーン県アマーラ近郊の湿地帯の偵察部隊の隊長として活躍した。イラン・イラク戦争後も、レバノンにおいて戦車部隊の司令官として実戦経験を積むなどして、2003年のイラク戦争を迎えたという。バアス党政権崩壊直後にバドル軍の一部としてイラクに戻り、その後駐留米軍が2004年8月にマハディー軍との戦闘(においてナジャフの聖域を侵害し占領軍的振る舞いを強めたと見られ始めた)後、2011年12月に駐留米軍が撤退するまで数々の対「占領軍」ジハード活動に直接司令官として携ったという(但しこの詳細は不明)。2012年夏にシリア内戦がダマスカス郊外のザイナブ廟を脅かすに事態になると、在ナジャフ・シーア派最高位法学者スィースターニーの呼びかけに答え、シリアで聖廟防衛に従事した。2014年6月に「イスラーム国」(当時は「イラクとシャームのイスラーム国」)がモースルを陥落させると直ちにイラクに戻り、二人のシーア派イマームの聖廟があるサーマッラーの防衛とティクリット解放作戦で現地司令官を務めた。20年前の1995年頃結婚し、「殉教」時には数え年49歳(すなわちバドル軍在籍31年の古参司令官)であり、15歳の長男、13歳の長女、5歳の次女、3歳の次男の4子の父であった⁹。

この戦死したバドル軍司令官のバグダードでの葬儀とテヘランでの追悼会の模様、さらに本人の経歴から、次の疑問がわく。バドル軍の司令官がイラクで戦死しているのに、なぜテヘランで初七日の追悼会がイラク側の親族も参加して開催されるほど、バドル軍と革命防衛隊の関係が密接なのか。とりわけそれが、バドル軍がイラクに帰還して12年も経つ現在でもそうであるのはなぜか¹⁰。これらの問いは、そもそもなぜ革命防衛隊はイラクにおいて対「イスラーム国」戦争の(側面)支援をしているのかという根本的な問いに関わるともいえるが、本論ではイラン内外で出版・報道されているペルシア語資料(イランの新聞・雑誌のイラク人関係者とのインタビューを含む)に中心的に依拠し、これら三つの問いに答えることを試みる¹¹。結論の一部を先取りして述べると、現在のイランの革命防衛隊によるイラク・シーア派諸民兵組織への支援は、1979年のイラン革命後に降りかかってきた(「強いられた」)イラクとの戦争中に、革命防衛隊(司令部)、その国境外の諜報・秘密工作司令部であったラマザーン駐屯地(そしてそのイラン・イラク戦争後の後継組織である今日のゴドゥス軍)、そしてイラク人ムジャーヒディーン(ジハード従事者)を革命防衛隊が組織化したものとしてのバドル軍の三者が、お互いを必要としながら関係を深めて行った経緯を踏まえずに説明できるものではない。

1. バドル軍と革命防衛隊の関係

かつてのバドル軍の軍旗に、(現在のバドル組織のものとは異なる、イランの革命防衛隊の意匠を左右反転し台に載せたものが付き)アラビア語で「バドル軍 1982-

1403、独立、自由、イスラーム国家」(Faylaq Badr 1982-1403h - istiqlal, hurriyah, hukumat islamiyyah)と書き添えてあるものがある。これによると、バドル軍の成立年はヒジュラ暦 1403 年(西暦 1982 年 10 月～1983 年 10 月)のように見えるが、実はバドル軍の創設時期やその起源については異なる言説が流布している。異論の背景は、誰がそもそも創設の発案者であるか、それが亡命イラク人なのか、イランの革命防衛隊なのか、という立場の違いに由来する意見の相違を反映している。そのうち、イラン側の資料としては最も信憑性が高いイランの革命防衛隊関係者の発言や殉教者・退役軍人財団が出版している雑誌『シャーヘデ・ヤーラーン』の叙述やインタビューによると、この軍事組織がそもそもバドル軍(ペルシア語での通称は Sepah-e Badr、アラビア語の Faylaq Badr に相当)と命名される基になったのは、イラン・イラク戦争中のイラン側のバドル作戦(1985 年 3 月 10～17 日)において、この亡命イラク人志願兵から構成される旅団(ペルシア語では tip、アラビア語の liwa'に相当する)が初めて単一の司令官の下に集結し、独立の単位として作戦行動に参加したことにあったという。したがって命名はこの作戦後のことであるが、当時ついた新たな名称が「第 9 旅団バドル」(Tip-e Noh-e Badr)であった。

司令官は、イラン南西部フーズスターン州ベフバハーン生まれ、同州アーガージェリー育ちの革命防衛隊員エスマーイル・ダガーエギーであった。ダガーエギーは、後のバドル軍司令官となる亡命イラク人のアブー・マフディー・ムハンディスやハーディー・アーミリーと同じ 1954 年生まれで、アフヴァーズの国営石油会社付属高校在学中に、同じ歳で後に(イラン・イラク戦争勃発後に)革命防衛隊総司令官になる同社付属工業高校在学中のモフセン・レザーイーと知り合い、共に革命運動に参加したとされる。1974 年にレザーイーと共に逮捕投獄されている。1979 年 2 月の革命時にはダガーエギーはテヘラン大学教育学部に在学中であったが、学業を断念し同年夏に故郷のフーズスターン州に戻り、故郷での革命防衛隊の立ち上げに関わっていた。イラクがそのフーズスターン州に攻め込みイラン・イラク戦争が始まると、アフヴァーズ第 92 機甲師団の「戦争司令部」に革命防衛隊の代表として参加するものの、1982 年春から 1983 年にかけて前線から離れた場所で防衛隊の任務についていた。しかし 1983 年に、ホメイニー師の布告を切っ掛けに前線に戻ることを決め、1984 年 2 月下旬のヘイバル作戦に前線の司令官の一人として参加した。彼が、レザーイー革命防衛隊総司令官の意向を受け、亡命イラク人志願兵(イラン側の資料の呼称によるとイラク人ムジャーヒディーン)からなる旅団の司令官になったのは、その直後のことであり、1984 年の春先であったという。最初の実戦配備となった 1985 年 3 月のバドル作戦で、この旅団はハウイーザ湿地帯のトゥラーバ地区を解放したとされる。ダガーエギーはその後、1987 年 1 月にバスラ解放を目指したカルバラー第 5 作戦遂行中に前線で戦死するまでの 1 年 10 カ月の間に、6 つの作戦で前線指揮を執り、亡命および「解放された」イラク人からなるこの組織を旅団から師団(「第 9 師団バドル」)へと育て上げたという¹²。

さてアメリカによる対イラク戦争の直前の 2002 年に現在のハーディー・アーミリーと交代するまでイラク・イスラーム革命最高評議会中央委員およびバドル軍の司令官を務めていたアブー・マフディー・ムハンディスなど、1984 年当時のダガーエギー司令官の側近などの証言によると、第 9 旅団バドル結成の背景には次のような展開があった。まず 1970 年代を通じ、構成員の数や組織化の程度の点においてイラク国内で最も成功していたイスラーム復興主義運動はダアワ党であったが、同党はとりわけ大学生の間で幅広い構成員を獲得していたという。1979 年 2 月にイランでイスラーム革命が成就すると、ダアワ党員を初めイラクのシーア派国民はイランにおけるイスラーム革命への支持を表明したという。1979 年春以降、イラク国内でもイスラーム革命運動が拡大する気配を見せると、イラクのバアス党国家内で強硬派のサッダーム・フセイン（当時副大統領）が権力を掌握し、ダアワ党およびシーア派イスラーム革命運動の大弾圧に乗り出した。その結果、構成員全体の 9 割とも言われるほど大多数のダアワ党員および、イラク国内におけるイスラーム革命運動の指導者アーヤトゥッラー・ムハンマド・バーキル・サドルが逮捕・処刑された。それを受けて、地下に潜った残りのダアワ党員はシリア、クウェイト、イランなどに逃亡し、またバアス党国家の弾圧の対象となったイラク南部湿地帯のシーア派部族民もイランへ移住（避難）してきた。1980 年 9 月にイラク軍がイランへ攻め込むと、これらの移動は 1981 年にピークを迎え、イラン国内のイラク人避難民・亡命者は全体として 2 万人規模になった。彼らの落ち着き先は、テヘラン、コムを除くと、イラク国境沿いで戦場ともなった南部のフーゼスターン州、西部のイーラーム州とケルマンシャー州に集中していたという。

イランの革命体制は当初、これらのイラク人に含まれているシーア派およびクルド系の政治活動家と、イラク国内の情報収集の目的でコンタクトを取っていた。シーア派アラブ避難民を多数受け入れた南部のフーゼスターン州では、アフヴァーズ西部にあった革命防衛隊のファジュル駐屯地でその情報収集を行っていた。イラクにおけるイスラーム革命運動の弾圧後、イランへ逃れてきていたシーア派のムジャーヒディーン達は、当初、ダアワ党、アマル（イスラーム行動組織）、ムハンマド・バーキル・ハキームがイランで新たに組織した「ムジャーヘディーン運動」（Harakat al-Mujahidin）などに分断されていたため¹³、それぞれの運動体の構成員の若者が対「バアス党体制」戦争へ志願兵として参戦する際にも、各地のイランの革命防衛隊の部隊に三々五々参加するに留まっていた。その後、戦況が展開し、イラン側がイラク軍に占領されていたホッラムシャフルを解放した 1982 年 5 月以降、イラク領土への進攻を念頭にこれらのイラク人志願兵を組織化する呼びかけがホメイニー師よりなされた。その実現のための最初の試みとして 1983 年 3 月から 4 月にかけて、フーゼスターン州アフヴァーズで亡命イラク人志願兵の軍事訓練が行われた。この訓練がムハンマド・バーキル・サドル殉教の命日に合わせて行われ、軍事訓練が行われた場所がシャヒード・サドル駐屯地（革命防衛隊側の名称はシャヒード・ガイユール・アスリー駐屯地）と名付けられた

ことから分かるとおり、この訓練を組織したのはダアワ党の軍事部門(おそらくアブー・ザイナブ・ハーリスィー)であった。イラク人の元幹部がバドル軍の創設にはダアワ党軍事部門が関わっていたという場合には、この軍事訓練のことを指していると思われる(ハーリスィーはその後イランの革命体制と犬猿の仲になったのか、ムハンディスと言及するのみで、革命防衛隊関係の文献には全く登場しない)¹⁴。

本論の文脈で興味深いのは、この軍事訓練がアフヴァーズ西部にあった革命防衛隊ファジュル駐屯地の指導の下で組織されたことである。このことは、フーズスターン州の革命防衛隊の諜報部門の一部であったファジュル駐屯地が、1983 年を境に亡命イラク人ムジャーヒディーン(ムジャヒディン)の軍事訓練と組織化に乗り出したことを意味していた。後述するとおり、ファジュル駐屯地は、現在のゴドウス軍の原型となる国境外の諜報活動と秘密工作を担当するラマザーン駐屯地が 1985 年 3 月にイラク北部のクルド地域に近い西部州のケルマンシャーに設立された際に、その傘下の四つの駐屯地の一つに位置付けられることになる¹⁵。

さて、1983 年春にこの訓練を経て組織された亡命イラク人部隊は、「シャヒード・サドル部隊」(Gordun-e Shahid Sadr)と命名された。その後、同年中にさらに二つの亡命イラク人志願兵の部隊(「シャヒード・ベヘシュティー部隊」「イマーム・ムーサー・カーゼム部隊」)が生まれ、この駐屯地で訓練を受けた部隊は三つとなった。その後、1984 年春にダガーエギーがこの駐屯地の司令官に任命され、それぞれ反目し合っていたこれら三つの部隊を、その指導の下でイスラームとホメイニー師への忠誠という共通要素を通じて一体化を図ったという。翌年のバドル作戦に参加した際には、このダガーエギーが率いる新たなイラク人ムジャーヒディーンから成る旅団は、1982 年にホッラムシャフル解放を実現した革命防衛隊の第 27 師団モハンマド・ラスローラーに属する「イマーム・サーデク部隊」という名で戦った。バドル作戦後、ダガーエギー司令官はさらに、イラク南部湿地帯の部族民から構成されていた「アンサール・ル・フサイン部隊」をも統合させ、旅団名を上述のとおり第 9 旅団バドルと改名した。

当時この旅団のイラク人幹部であったムハンディスなどによると、ダガーエギーはこの旅団をイラクにおけるイスラーム革命の前衛部隊であると位置づけ、副官を全てムハンディスなどイラク人ムジャーヒディーンから任命し、イラクのバース党体制が転覆された暁にはイラクの新国家の「イスラーム革命防衛隊」となる旅団であるとして、その目的のため誠心誠意、軍隊としての組織化を進め、その姿勢からイラク人ムジャーヒディーン達の絶大なる信頼を獲得していたという。ムハンディスは後年インタビューで、バドル軍はイランにおいて組織化されたためイラン人の革命防衛隊員が司令官を務めていたと説明する一方で、彼自身のように大学卒の元ダアワ党員から、湿地帯の漁民であった部族出身者や、さらにシーア派ですらないクルド系イラク人など雑多な文化的・社会階層的な亡命イラク人の寄せ集めの部隊を、ゼロから訓練・指導し、専門職

的な軍事組織に育て上げたダガーエギーらイランの革命防衛隊司令官の貢献については正当に評価している¹⁶。

これらの経緯から分かることは、少なくともイラン・イラク戦争当時は、第9旅団(師団)バドルは、作戦指令系統的には完全にイランの革命防衛隊のユニットであったということである。これに関し、革命防衛隊は、イラン・イラク戦争は領域主権国家間の領土等をめぐる「地理的な」戦争ではなく、イスラーム革命体制と反イスラーム革命のバース党体制との間のイデオロギー的戦争であったため、亡命イラク人ムジャッヒディーンがイランの革命防衛隊の一部としてバース党体制の軍隊と戦うのは全く問題なかったとしている。裏返すと、この時点では、第9旅団(師団)バドルと、バドル軍が新イラク国家の「革命防衛隊」との想定だったとすれば、いわば「待機中の政府」であった、ムハンマド・バーキル・ハキームが率いる「イラク・イスラーム革命最高評議会」の関係は、政治的・象徴的なものに留まっていたといえる。その一方で、革命防衛隊のそれぞれの旅団がイラン国内の同じ州の出身者から構成されていたのとは異なり、第9旅団(師団)バドルは全て亡命(および1986年以降はイラク軍逃亡兵ほか「解放された」)イラク人から構成されているという異特性を持ち、また作戦内容もイラク国内に潜入して行う偵察やバース党体制の転覆につながる工作など、当初より明らかな違いが存在していた。この後者の役割において、第9旅団(師団)バドルと密接な関係を持たされたのが、上述のとおり現在のゴドウス軍の原型であるラマザーン駐屯地であった。その創設に関わった一人が、ダガーエギーと同様、革命後にフーズスターン州の革命防衛隊の創設者の一人で、1983年に亡命イラク人ムジャッヒディーンの軍事訓練を始めたときには、アフヴァーズのファジュル駐屯地で諜報担当を務めていたハミード・タガヴィーであった。この関係もあり、ラマザーン駐屯地創設後、アフヴァーズに駐屯していた第9旅団バドルの一部が、イラク北部における秘密工作作戦に従事するため、同駐屯地に配属替えになったといわれる¹⁷。

当時ラマザーン駐屯地の諜報部門の幹部であったモハンマドアリー・ラフマーニー准将によると、当初は国境外の情勢に関する革命防衛隊の諜報部門の一部として存在していたラマザーン駐屯地が、イラクとの南北に走る国境線全ての反対側において秘密工作を行う任務を負うことになったのは、1985年に(イラン・イラク戦争停戦後に革命防衛隊統合本部長と総司令官代理をそれぞれ8年ずつ務めることになる)モハンマドバーゲル・ズルガドル准将が同駐屯地の司令官に任命されてからだという。そこでの役割分担は、ラマザーン駐屯地が秘密工作の立案準備を、それを第9旅団(師団)バドルがイラク国内で実施するというものであったことから分かります。このラマザーン駐屯地のミッション(ひいては現在のゴドウス軍のミッション)は、論理的にも、イラク人ムジャッヒディーンから構成された第9旅団(師団)バドルの存在の前提にしたものであった¹⁸。イラン・イラク戦争中に、新設されたばかりのレバノンのヒズブッラーが、革命防衛隊による第9旅団(師団)バドルの組織化を視察するために訪れたと、当時

のイラン人司令官が後に誇らしげに語っているとおり、革命防衛隊の視点からすると、第9旅団(師団)バドルの存在は、単なる「聖なる防衛」の道具ではなく、各国のムジャーヒディーンを組織することによる「イスラーム革命の輸出」の模範例と考えられていたともいえる¹⁹。

2. 湾岸戦争後の自立、イラク戦争後を経て、対「イスラーム国」防衛で再び？

1987年1月にダガーエギー司令官が戦死すると、テヘラン出身で、西アーゼルバーイジャン州にあるハムゼ・セイエドッ・ショハダー駐屯地の設立に携り、西部戦線で諜報活動に関わっていた、モハンマドレザー・ナグディーが第9師団バドルの司令官に任命された。ナグディーはラマザーン駐屯地のゾルガドル司令官と連携し、イラン・イラク戦争末期のイラク領内における第9師団バドルの秘密工作活動(例えば1987年10月のキルクーク近郊でのザファル第2作戦など)を指揮した。ナグディーは、イラン・イラク戦争停戦後さらに1年間この任務を務め、1989年にモルテザ・ゴルバーニー准将(1986年2月のヴァルファジュール第8作戦における第25特別師団カルバラーの指揮官)に司令官の地位を引き継いだとされる²⁰。その後バドル軍は、まだイラン国内に留まっていたものの、1991年1月の対イラク湾岸戦争勃発時までに、革命防衛隊の一旅団ではなく、ムハンマド・バーキル・ハキームが率いるイラク・イスラーム革命最高評議会の軍事部門(al-jinah al-askari)として、イラク人ムジャーヒディーン自らが指揮権を持つ武装組織へと転換していた。バドル軍は、1991年の湾岸戦争後のイラク国内の一斉蜂起(インティファード)の際には、勢力の半分をイラン国内に温存させ、残りの部隊がイラク国内でインティファード側の組織・支援を行ったという²¹。この蜂起は、多国籍軍が黙殺する中、イラク軍の暴力的な鎮圧により失敗に終わるが、このことが軍事組織としてのバドル軍のその後の戦略的思考に与えた影響は看過できない。

さて紙面の関係で経緯を大幅に省略するが、2003年3月から4月にかけてのアメリカの対イラク戦争によりバアス党体制が崩壊すると、その直後(4月9日および10日)にバドル軍はイラクへ「帰還」を果たした。その際に、上述のタガヴィー革命防衛隊ゴドゥス軍の司令官がバドル軍と共にイラン・イラク国境を越えてイラク領内へ入ったとされる²²。ゴドゥス軍は1991年に、西部国境外を担当していたラマザーン駐屯地、当初レバノンとアフガニスタンにおける同様の活動を任務としていたビラール駐屯地(Qarargah-e Bilal)、さらにマシュハドに設置され東部国境外の活動を担当していたアンサール駐屯地の三つが統合されて、できたものだという。初代のゴドゥス軍司令官には、イラン・イラク戦争中にレザーイー革命防衛隊総司令官の腹心の諜報担当を務め、後にアフマディーネジャード政権期で国防次官、国防大臣を務めるアフマド・ヴァヒーディー准将が任命された。その後、1981年より総司令官であったレザーイーに代

わり、1997 年秋にヤフヤー・ラヒームサファヴィーが革命防衛隊総司令官に任命された後、現在のガーセム・ソレイマーニーが第 2 番目のゴドゥス軍司令官に任命された。ソレイマーニーは、イラン・イラク戦争中は第 41 師団サーロツラーの司令官を務め、停戦後は故郷のケルマーン州に戻り、同州の革命防衛隊司令官として、アフガニスタン・パキスタン国境沿いのスィースターン・バルーチスタン州からケルマーン州へ入ってくる麻薬取り締まりの任を務めていた。すなわち、ソレイマーニーはゴドゥス軍司令官に任命されるまで、イラン国境外の諜報活動にも秘密工作活動にも全く関与していなかった。しかし、彼の任期中に 2001 年 10 月から 11 月のアフガニスタン空爆でターリバーン政権が崩壊、2003 年にイラク戦争でバース党体制が崩壊し、さらに 2006 年にはヒズブッラーとイスラエル間のレバノン戦争が勃発するなど、ゴドゥス軍が深く関与する展開をつくる地域情勢が続発した。その結果、まめに自ら顔を出す徹底した現場主義を貫くその才覚と貢献が認められ、極めて異例ながら、2011 年 1 月に革命防衛隊総司令官と同じランクの少将(Sarlashkar-e Pasdar)に昇格している。

さて 2003 年の米軍の侵攻によるイラクのバース党体制崩壊後のイラク国内情勢、とりわけ 2014 年 6 月のモースル陥落後の情勢は、革命防衛隊とバドル軍の関係を振り返った本論の文脈から見ると、様々な意味で大変興味深い。まず、イラク国軍と並んで組織された人民動員隊が今日置かれている状況は、組織されたばかりで革命直後に西部州でクルド人の武装蜂起を鎮圧したことを除き実戦経験を持っていなかったイランの革命防衛隊が、イランの正規軍と並んで 1980 年 9 月にイラクによる侵攻で国土防衛・失地奪回を図らねばならなかった状況によく似ている。たとえば、現ゴドゥス軍司令官のソレイマーニーは、1956 年(あるいは 1957 年)生まれであるが、家庭の困窮で小学校しか出ておらず 1979 年の革命時までは建築現場やケルマーン州の水道局の下請けの仕事などをしていたとされるが、革命後にケルマーン州で革命防衛隊に志願し、約 1 カ月半の軍事訓練を受け西アーゼルバーイジャン州のクルド反乱運動鎮圧に送られたという²³。この状況は、モースル陥落後にシーア派志願兵が短期の軍事訓練を受け、対「イスラーム国」人民動員隊として前線へ送られる状況に極めて似ている。またバドル組織が内務省を管轄し、イラク国軍とシーア派民兵組織が平行して対「イスラーム国」戦争を遂行している状況も、イラン・イラク戦争初期に、イスラーム革命委員会が国内の治安維持に当たり、正規軍と革命防衛隊がお互いに対立しながら、対イラク戦争に従事せざるを得なかった状況と同じ構造的問題を抱えている。マリーキー前首相は 2015 年 8 月のイラン訪問時に、人民動員隊をイランの「バスイージ抵抗軍」に倣って創設したと語っているが、警察予備隊に近い役割を主に果たすバスイージよりも、イラン・イラク戦争勃発時の革命防衛隊の方が、内実はより近いといえる²⁴。

このような状況の下で、イラン・イラク戦争勃発時を知る古参の革命防衛隊幹部が、モースル陥落後のイラク情勢を見て、再び血が騒ぐ思いに駆られているのは想像に

難くない。例えば上述のゴルバーニー准将は、2014 年 9 月のインタビューで、「自分はバドル軍司令官であった。イラク国内のことはよく知っている。ハーメネイー最高指導者が命じるならば、500 名の志願兵と共に「イスラーム国」を 2 カ月でイラクから駆逐してみせる」と豪語している²⁵。その意味では、1983 年にアフヴァーズのファジュル駐屯地の司令官の一人として、亡命イラク人ムジャヒーディーンの訓練に関わり、1985 年からケルマンシャーのラマザン駐屯地所属の作戦司令官の一人として第 9 師団バドルのイラク国内工作活動に関与し、バアス党体制崩壊後は 2003 年 4 月 9 日にはバドル軍の帰還に同行してイラクに入り、革命防衛隊ゴドゥス軍の中で随一のイラク通として米軍駐留期のイラクにおいてもシーア派民兵組織の組織に当たっていたタガヴィー准将が、2014 年 6 月のモースル陥落以降にサーマッラー防衛作戦に軍事顧問として関わっていたことは、驚きではない。55 歳のタガヴィーが、2014 年 12 月 27 日に「イスラーム国」の狙撃兵の手によりサーマッラーで戦死すると、シリア内戦、「イスラーム」国関係で「殉教」した中では最も「名高い」革命防衛隊関係者であったこともあり、テヘランの革命防衛隊司令本部での納棺・葬儀と、翌日故郷のアフヴァーズで行われた葬儀・埋葬には、ソレイマーニー・ゴドゥス軍司令官はもとより、数々の革命防衛隊の古参幹部司令官が参集した。またテヘランでの初七日の追悼会には、ヴァヒーディー前ゴドゥス軍司令官ら革命防衛隊幹部に加え、イラクからバドル軍司令官ハーディー・アーミリーとイスラーム最高評議会議長アンマール・ハキームも参列した²⁶。

振り返って考えると、イランの革命防衛隊自身がイラン・イラク戦争の産物であり、それに前線司令官として関わった古参幹部が、50 歳代後半から 60 歳代となりながらもいまだに革命防衛隊の幹部である時期に、さらにムハンディスやアーミリーなどバドル軍の前身の第 9 旅団バドルの組織時からの幹部が現在イラクでシーア派民兵組織の幹部として幅を利かせている時に、シリアにおける内戦や「イスラーム国」の猛進の結果、シリアのザイナブ廟やイラクのサーマッラーなどのシーア派聖廟都市、さらに、首都バグダード防衛の急務があらわれた。そう考えると、現在のところまでのイランの革命防衛隊の関与が、武器弾薬供与と少数のゴドゥス軍司令官らによる「軍事顧問」としての参画・援助に限定されていることは、冷静かつ最低限度の関与に留めている事実を示している。その意味では、全体としては、あの「聖なる防衛」をもう一度というような、センチメンタルな理由の支援ではないことは明らかである。しかしながら、2014 年のモースル陥落後のイラクにおける情勢は、バドル軍とイランの革命防衛隊の間のかつての密接な関係を再興させるものであっただけでなく、イラク国内におけるシーア派民兵組織の将来を考える際に、イランの革命防衛隊ゴドゥス軍とその前身組織の果たしてきた役割を考慮に入れる必要があることを思い出させるものであったといえる。

筆者略歴

松永 泰行（まつなが やすゆき）

東京外国語大学教授。ニューヨーク大学(NYU)大学院修了(政治学博士)。在イラン日本大使館専門調査員等を経て、2013 年より現職。

¹ 通説では亡命イラク人がイランで結成したイラク・イスラーム革命最高評議会(現在の名称はイラク・イスラーム最高評議会)が、1980 年初頭にその軍事部門としてバドル軍(Faylaq Badr)を組織したとされているが、本論はペルシア語・アラビア語資料に基づき、通説には取り込まれていないイランの革命防衛隊の役割に焦点を当てる。バドル軍は、イラク戦争後の 2003 年 9 月、占領当局による民兵組織の解体要求に応え、バドル組織と改名されたが、旅団が存在しているように、軍事機構の側面は実質的に維持されている。

² “Iraq IS conflict militia funeral,” *AFP TV*, Baghdad, Iraq, July 14, 2015; “Badr tuzaffu majmu‘ah min abtali-ha ash-shuhada,” *Iraqcenter.net*, July 14, 2015; “Tashyi‘ al-shahid wa’l-qiyadi fi’l-hashd al-sha‘bi Abu Muntadhar al-Muhammadawi,” *Abna*, July 14, 2015.

³ アバーディー首相は、6 週間後の 8 月 27 日に国軍側のアンバール作戦の司令官代理ラギーフ少将が「イスラーム国」の自爆攻撃で戦死した際の葬儀には参列した。“Al-‘Abadi yatasaddaru mushayyi‘i mu‘awin qa‘id ‘amaliyat al-anbar wa qaid al-firqat al-‘ashirah,” *Kitabatnews*, August 27, 2015.

⁴ “Joz‘iyyat-e Shahadat-e Abu Montazar al-Mohammadavi,” *Rahberey*, July 20, 2015.

⁵ 垂れ幕にはかつてのロゴが出ているが、現在の名称は殉教者・退役軍人財団(Bonyad-e Shahid va Omur-e Ithargaran)である。

⁶ これも現在のバドル組織のロゴではなく、かつてのバドル軍のロゴが使われていた。

⁷ ゴドウス軍は、陸抵抗、海、航空宇宙と並ぶ、4 軍編成のイスラーム革命防衛隊の一部であるが、ロゴは別途持っている。機関銃を握り締めた拳を突き上げた意匠は共通であるが、ゴドウス軍のロゴにはイスラーム革命防衛隊というペルシア語の文字と設立年の 1357 という数字が表記されていない。イラン国境外で非公式に活動する同軍の特徴を表しているといえる。

⁸ “Marasem-e Bozorgdasht-e Farmandeh-ye ‘Amaliyat-e Sepah-e Badr-e ‘Eraq Bargozar Shod,” *Abna*, July 22, 2015; “Hashiyeh-ye Marasem-e Bozorgdasht-e Farmandeh-ye Sepah-e Badr dar Shahr-e Rey,” *Rahberey*, July 21, 2015.

⁹ “Shahid al-Mohammadavi az Farmandehan-e Sepah-e Badr Kist? Zendeginameh,” *Tasnim*, July 21, 2015; “Feraz-o-Neshib-e Bist Sal-e Zendegi-ye Moshtarak ba Farmandeh-ye Shahid-e Sepah-e Badr-e ‘Eraq,” *Tasnim*, July 22, 2015; “Payam-e Sardar Naqdi beh Farmandeh-ye Sepah-e Badr va Mardom-e ‘Eraq,” *Fars*, July 23, 2015.

¹⁰ 本論では紙面の関係で考察しないが、革命防衛隊のバドル軍への支援が、バドル軍設立の経緯とそれ以来の密接な関係に基づくもののだとしても、革命防衛隊はなぜ他の(イラン系ではない)イラクのシーア派民兵組織、具体的には(ムクタダー・サドルの父の)ムハンマド・ムハンマド・サーディク・サドル系で比較的に新参組織のアサーイブ・アフル・ル・ハックをも支援しているのか、という疑問もわく。

¹¹ この最後の問いに関する 2014 年 11 月初旬時点での拙論については、次を参照。松永泰行「シーア派イスラーム革命体制としてのイランの利害と介入の範囲」、吉岡明子・山尾大(編)『イスラーム国』の脅威とイラク』(岩波書店、2014 年 12 月)、247-265 頁。

- ¹² “Esmā‘il-e Daqayeqi az Veladat ta Shahadat,” “Mojahedin-e ‘Eraqi Shoja‘at Ra Az Esmā‘il Amukhtand,” “Tip-e Qodratmand-e Noh-e Badr ba Tavanmandi-ye Modiriyati-ye Daqayeqi,” and “Sepah-e Badr Mirath-e Javdan-e Shahid-e Esmā‘il-e Daqayeqi,” *Shahed-e Yaran*, No. 87, Dey 1391 (January 2013), pp. 4-11, 38-42, 50-54, and 76-82.
- ¹³ この名ばかりの組織の設立年もイラン暦で 1362 年(西暦 1983-84 年)とされており、バドル軍旗にある 1982 年が何を指すのかは不明である。
- ¹⁴ *Shahed-e Yaran*, No. 87, pp. 10, 38, 51. ハーリスィーへの言及は、“Abu Mehdi al-Mohandes Kist?” *Rajanews*, March 19, 2015; “al-Mujahid Abu Mahdi al-Muhandis ... Muhandis al-Thawrat al-Muqawamah,” *aletejah*, July 1, 2015.
- ¹⁵ *Shahed-e Yaran*, No. 87, p. 51.
- ¹⁶ 前掲誌, pp. 38-42, 51, 77-78.
- ¹⁷ 前掲誌, p. 53; “Goftgu ba Hamrazm-e Shahid-e Seyyed-e Hamid-e Taqavi,” *Bubasij*, February 8, 2015; “Shahid-e Taqavi Khatamak-tarin Ma‘muriyat-ha ra Davtalabaneh Qabul Mi-Kard,” *Behbahan-news*, December 30, 2014.
- ¹⁸ “Yekparchehi-ye ‘Amaliyat-e Nezami Aleiheh-ye Rezhim-e Ba‘th,” *Shahed-e Yaran*, No. 41-42, Farvardin-Ordibehesh 1388 (April 2009), pp. 92-94.
- ¹⁹ *Shahid-e Yaran*, No. 87, p. 52.
- ²⁰ “Negahi-ye Tafsili beh Karmameh-ye Sardar,” *Rajanews*, October 7, 2009; “‘Shams’-e Jebbeh-ha va Farmandeh-ye Abu Montazar Keh Bud?” *Defapress*, July 22, 2015.
- ²¹ *Shahid-e Yaran*, Nos. 41-42, p. 95.
- ²² したがって、別組織になっても、革命防衛隊(とりわけゴドゥス軍)とバドル軍の密接な関係は維持されていたとみられる。その詳細は、今後の解明が必要な部分である。
- ²³ “Zendeginameh: Qasem-e Soleymani (1335-),” *Hamshahrionline*, July 17, 2012; Ali Alfoneh, “Zendeginameh-ye Sardar-e Qasem-e Soleymani,” *AEI.org*, January 24, 2011.
- ²⁴ “Nuri-ye Maleki dar Goftogu-ye Tafsili ba Abna: Dar Tashkil-e Hashd-e Sha‘bi az Bsij-e Iran Olgu Gereftim,” *Abna*, August 16, 2015.
- ²⁵ “Sardar-e Qorbani: Da‘esh ra az ‘Eraq Paksazi mi-Konam Agar ...” *Shohadayeiran*, September 7, 2014.
- ²⁶ “Marasem-e Tashyi‘-e Shahid-e Taqavi,” *Fararu*, December 29, 2014; “Sardar-e Soleimani dar Tashyi‘-e Shahid-e Taqavi,” *Fararu*, December 30, 2014; “Marasem-e Bozorgdasht-e Sardar-e Shahid-e Hamid-e Taqavi Bargozareshod,” *Sepahnews*, January 5, 2015; “Farmandeh-ye Sepah-e Badr va Rais-e Majles-e A‘la-ye ‘Eraq dar Marasem-e Bozorgdasht-e Shahid-e Taqavi Hozur Yافتand,” *Defapress*, January 5, 2015.